

◆ロックとか短歌とかを定義してみる話

堂那灼風

音楽プレーヤーは出かける際の必需品だ。アルバイト中のBGMや帰り道の暇潰しに音楽は欠かせない。

私が聴く音楽はだいたい詞がついた曲であり、特に好むものはロックだとか、ロック調だとか、そういうふうに分類される歌が多い。どうやら私はロックを好んで聴くようだが、ロックとはなにか、それを言葉で説明するのは難しい。もちろん音楽史や技法の面から定義付けることは(調べれば)できるが、音楽に疎い身にはピンと来ない。

アプローチを変えてみよう。なぜその曲が好きなのか、そこにある共通点からロックなるものの性格を考える。例えば激しくスピード感のある曲調。あるいは前向きで力強くエネルギーに満ちた歌詞。心を燃やし鼓舞してくれるものが特に好きだ。そこに表れているのは強い人間の姿。苦境にあっても立ち上がり前に進もうとする姿。愛してやまない漫画や小説にも共通するその要素、根底には人間を愛し信じる心がある気がする。その心を感じ、私の心もまた震える。熱を上げる。

つまるところ、ロックの魂は逆境への反抗であり、己の信じるものを守り貫く姿ではないかと思う。闇雲に乱暴に駄々をこねるのではなく、信念に基づいて、従えないものには抗い、脅威には立ち向かい、愛を正義を希望を示す。言葉と音を通じてそれを行うのが音楽におけるロックではないか。

しかし私は詠う。

短歌とはなにか。どう答えるかは千差万別だと思ふ。一応の立場を示すなら、それは私の世界を言葉によって具現化する文法だ。不思議なこと三十一文字は単純な辞書的意味以上の意味を読者に

突きつける。例えば雲間から光が差している風景を描写したならば、それは天気の話に留まらない。書かれた言葉のリズム、あえて書かれなかった言葉、それらが噛み合わされば余韻と広がりが生じうる。これは音楽と似ている。単音を組み合わせるとまった旋律にする、その音は不思議と高揚や癒しや畏怖を喚起する。短歌は実に音楽的な文芸である。

詩歌と音楽との関係は古い。吟遊詩人と呼ばれる人々は様々な場所・時代に存在し、詩とは旋律に合わせて歌われる韻律を持った言葉であった。抑揚をつけて読み上げられ(歌われ)る和歌のイメージも日本人に広く共有されているものだろう。音楽との親和性、韻律の心地よさ、このあたりを詩の成立条件に挙げるならば、短歌の定型が持つ韻律は我々の言葉を音楽的な詩へと変換してくれる不思議な装置にも思われる。

私が短歌の形式を用いて主に書こうとしているのは、私が夢想する世界、こうありたいと願う姿、こうあってほしいと願う未来。あるいはそれを祈りと言っても良いかもしれない。

人は日々様々なものに影響を受けながら過ごし、表現に携わる者はそれを糧として自らの表現に織り込んで生きていくものだと思う。新しい感動に出会うたび私の世界は少し変わる。それを書き続けていきたい。

叫んだり爪先立ちをしたりしてやがて艶めく人の歌声

堂那灼風

◆ホットスポット

谷村行海 a.k.a ERKN

見た目と中身が一致する人が羨ましい。

二十一年生きてきたが、初見で僕が短歌（とか）をやっていると見抜いた人に出会ったことがない。僕が短歌をやっていると「えー、そういう風に見えない！」などとと言われる（僕にはそもそも短歌をやっていないような見た目というものの自体意味がわからないが）、大抵の人はバンド活動とかをやっている（？）と聞くと「角川の短歌バトルに出たときも「園子温っぽい」とか「歌手かな？」といったコメントが流れた。短歌をやっている人でもそうでなくても、僕はやはり短歌をしているように見えないらしい。

そんな僕だが、めでたく（？）見た目と中身が一致する趣味に出会った。ラップだ。きっかけは知人がUMBというMCバトルの全国大会のDVDを貸してくれたこと。ビートにのりながら言葉で戦うそのスタイルに感銘を受け、一瞬にして僕はラップの虜になった。気になったラッパーの音源を漁ったり、ラップ関連のイベントに足を運んだり、友人の主催するサイファーに参加したり（もつとも、サイファーに参加したのは一度きりだが）、はては大学の授業のレポートをラップと現代社会とを結び付けて書いたり、はまってからの生活にはどこかラップの気配が漂っていた。

ラップにのめり込むうちにラップと短歌は似ていることに気付いた。ビートは短歌の題のようなものだし、韻は短歌の韻律、フロウは短歌のスタイルにそっくりだ。存在もそっくりで、ほとんどの歌集が自費出版であるのと同じでラップのCDも基本的には自腹。そして、短歌をやっている人はほぼ全員言われたことがあると思うが、「ここで一首！」と無茶振りされるようにラップでも「何かここでやってみてよ」などと言われる。僕がラップにはまったのも世

間的に流行っているからとかではなく、何だか運命的なような気がしてくる。

ところで、先ほど少しふれたが、僕はサイファー（参加者でラップの練習をしたりするような場）に一度しか参加していない。ラップを聞くのは好きでもラップをするのは苦手、というのもあるが、理由は他にある。お前が言うかと思うかもしれませんが、参加者がちよつと怖いからだ。いかにもラップをやっています、という見た目の人がラップの言葉で話しかけてくるのが怖かったのだ。

結局、見た目と中身が一致しても困ったものなのかもしれない。

ラッパーの言葉はガスの先を行きどこかのボーイがボーイをやめる

谷村行海

◆世界の終わりに鳴り響いていよう

関 寧花

両親の趣味で、胎児の頃からパンクやスラッシュメタルやハードロックばかり聴いていた。幼いころのホームビデオを再生すると、三歳の私が QUEEN や KISS のライブ映像を見ながらリビングで踊り狂っている映像を見ることが出来る。その幼児教育の甲斐あつてかなくてもか、中学に上がるころには私も音楽を好むようになった。親の影響で七十〜九十年代の洋楽も聴くことがあつたが、やはり中学、高校生の私には現代日本のバンドが聴きやすく、心地よかつた。

私に一番熱心に音楽を教えてくれるのは父だ。若いころに小さな音楽レーベルでマネジメント業に就いていたこともあり、音楽のことは誰に聞くよりも父が確実だつた。一時期は反抗期で、父親の絶対的な知識量と人生経験を理不尽に毛嫌いしていたこともあつたが、それも尊敬の裏返しだつたと今ならわかる。尊敬できる親を持たたというのは、この上ない幸福の一つだろう。けれどその反抗期にはちゃんと理由があつた。父はその絶対的な音楽の知識を駆使して、私の好きな音楽を徹底的に論破しようとしてくるきらいがあつたのだ。

リビングでCDをかけていれば「そのイントロは××のパクリだ」「そんな二番煎じ聴いていないで本物を聴け」と、こちらとしては欲しくない『正論』を暴力的に叩きつけてくるのである。バンド音楽なんて、ビートルズ以来ほとんど楽器も形式も変化がないのだから多様性といつても無理がある。それに私と父の音楽の聴き方は少し違つた。かっこいいギターリフを、重たく精密なベースラインを求める父とは違い、私は歌詞に重きを置いて曲を聴いていた。楽器がてんでできない、音楽の知識がほとんどないという部分から逃げただけだと言われてしまえばそれまでだが、言葉、歌詞というものは私の音楽の基準のなかではかなり大き

なものだつた。そして歌詞の良し悪しを放り出してしまえるほど純粹にすばらしい音楽に出逢えれば、私は心底それに感動した。とにかく私は父の言葉にいちいち反抗し、父の知識の及ばない場所へ行こう、と強く思うようになった。

そして高校一年の時に短歌を始めた。もともと読書も好きで根っからの文系だつたので、別に不思議なことではなかつた。先述の不純な動機も少なからずあつたが、それだけでなく短歌は私の中で音楽ととても近い場所にあつた。自分の内から吐き出すよりも確に私の気持ちを代弁してくれる歌が沢山あつたし、霧がかかつたようにしか見えていながつたさまざまな内面の見晴らしを、短歌が良くしてくれたのだ。短歌との出会いはやはり運命的だつたと胸を張つて言える。高校時代に使つていたノートや手帳を開くと、いたるところに笹井宏之や河野裕子や寺山修司や、それ以外の数えきれない歌人の歌が書き記してある。家族、友人との不和によるいら立ちや、雨の水曜日の憂鬱や、理由の不鮮明な虚脱感を、短歌の呪文めいた力は何度も和らげてくれた。

孤独やコンプレックスや避けようのない不幸を、愉快にコミカルに歌い上げる詞が好きだ。と気づいたのは最近で、気づいてからは私が詠うものもそうでありたいと願うようになった。夜に取り残されたとき、自己嫌悪や劣等感が部屋を訪ねてきたとき、明日がくるという当たり前がどうしても許せなくなつたとき、イヤフォンがなくても頭の中でガンガンと鳴り響くような、騒音武装としての役目を果たせる歌が詠みたい。

明け方を凍り付かせるほど泣いてまたこの曲が人生になる

関 寧花

◆家で天気予報を見るほど悠長じゃない

山崎有理

冬雨からのがれるところを探して、おれはまごつきながら考えていた。傘をわすれてきていたので、適当な喫茶店でも落ち着いていられなかった。いまさらスマホを見てみると、どうやらすぐに上がる雨ではないらしい。ようやくのサンドイッチを放って置いて、テーマを何にするか考え込む。

音楽と短歌のつながりは詩作をはじめた頃から考えている。扱いたいテーマは山ほどある。4・4の8のことや、脚韻と頭韻のこと。現代人たる西洋のリズムと和歌からの韻律を比較すること。J-POPに対する口語短歌の必要性。ヒップホップ文化にまでもたどりつきながらに、どれも感覚的でない裏付けが欲しくてよろしくない。エッセイらしく自分自身に立ち返ってみると、どうも引つかかる経験があった。

歌人はやたら音楽に詳しい。

感覚ではない。知識の話である。自分は軽音楽サークルにもいたが、これほどまでにPodの中身を詮索されたことはない。歌会ではポップな歌詞が引き合いに出る。カラオケはあまりにも多芸多彩。家に行けば立派なコレクションが待っている。いろんな畑の人が専門的に奥深い。そもそもこのエッセイのテーマが「音楽と短歌」であるほどに、歌人が音楽について考えている。

ようやく帰って考えを整理すると、両方がどうしようもなく室内であることに気づく。インドア趣味というだけでなく、その生まれる過程だ。短歌も音楽も確かに外にある。歌集やBGMだけではなく、とりまぐ言葉や風景にも必然的なリズムを感じる。だが、それを取りまとめるのは室内にある。画面やノート、どこへ向かおうとそこは安全と安息の場所だ。記憶と想像が外部を参照する。これが他の芸術と「音楽と短歌」とを峻別するものである。

小説はそれを表現するだろう。俳句や詩はそれが表象される。絵画や映画はそれを表出させる。ところが音楽も短歌も、それを裏においてしまっている。たとえば吟行から戻ったあとの歌会で、「果たして彼らが行ったのは同じ場所なのだろうか」と思わせられることは多々あるだろう。これは鑑賞するときも創作するときにも同じで、作品を通じて体験や視線を同期させる必要がない。そんなものは個人の勝手であり、また責任でもある。そして強みであり、弱みなのだ。具体的な必然性を捨て、翻訳される前の感覚を形づけているのだから。

作者とはすべての文法と思想をうつそうと溜め込み、そのすべてを作品へ、わずかなかたちでにじませる。怠惰なだけの啄木や浮世離れしたディランがうたう社会の苦しみに万人が共感する。会ったこともないそんなの文に恋すてふ。いまの月光と古い月光、あまりにも価値が違いすぎる。そのとても見えない線を結びつける力が、各自が持つ内から外への想像力である。つまり、そのときひとは家にいる。

自己中心的な感覚が劇的に共通していく。すぐれた音楽と短歌に共通する感覚だ。だから歌人は音楽に惹かれる。厳密に遮断された、内なる韻律が発酵する。

雨ふりのように鏡をなでているおれの指紋を見たくないから

山崎有理

◆音楽と短歌——野坂昭如「黒の舟唄」ほか

吉田隼人

このあいだ池袋の名画座で森崎東監督の映画「喜劇 特出しヒモ天国」を観た。墓地を挟んで寺と隣り合っている京都のストリップ劇場を舞台に、ストリップパーとそのヒモたちの、バイタリティ溢れるようである。皮剥けば黒々とした虚無の支配する生活をえがいた傑作だが、ビデオやDVDの類は一切出ていない。これといった物語はなく、劇場支配人に引き抜かれてヒモ稼業に手を染めるセールスマン（山城新伍）、交通整理をしていたデブ女をスカウトするも照明係の男に寝取られてしまう老齡のヒモ（藤原釜足）、アル中でふらふらしていた処を拾われて舞台上に入るローズ（芹明香）と彼女を逮捕しようとして自分も舞台上に上げられてしまい、仕事を減らなってヒモに転身する元刑事（川谷拓三）、出産資金を稼ぐため夫婦二人三脚で聾啞の妻をストリップパーに仕立て上げようとするこれも聾啞の男（下條アトム）など、一癖も二癖もある連中のアネクトトをつなぎ合わせた群像劇になっている。

映画終盤、興業先の劇場が火事になり、新たに子持ちの女をストリップパーに育て上げようとしていた藤原釜足の老ヒモが彼女もろとも焼死してしまい、その葬式でアル中のローズを皮切りに、踊り子やヒモが揃って歌をうたう。直木賞作家・野坂昭如のロングヒット「黒の舟唄」だ。「男と女の間には深く暗い川がある、誰も渡れぬ川なれどエンヤコラ今夜も舟を出す……」その歌声に、墓地の向こうの寺で住職（殿山泰司）が説く厭世的な法話が被さる。死んだらどこへ行くのか誰にもわからない、あの世だって地獄だか極楽だか知れない、この世こそが地獄だ、生きていても救われない、死んでも救われない。「思えば幾年こぎつづけ、大波小波ゆれゆられ、極楽見えたこともある、地獄が見えたこともある……」

深く暗い川が流れているのは男と女の間だけではない。あらゆる人

と人とを隔てる暗い川。その最たるものが生者と死者の間の三途の川だろう。ヒモの老人たちが焼け死んだとき、焼酎に酔ったローズは夜の川で泳いでいた。酔って川なんかに入ったら死んでまうぞ、と叱られても、冷たくて気持ちええわ、と暗い水面に浮かぶ芹明香のニヒルな笑いが美しい。「お前と俺との間には深く暗い川がある、だけでもやっぱり会いたくてエンヤコラ今夜も舟をこぐ……」一抹の救いのように終盤、聾啞の夫婦に元気な子が産まれるシーンがあるにはあるが、最後はまた陰気な「黒の舟唄」。この曲はレコードのB面だが、A面の「マリリンモンロー・ノーリターン」もこんな歌だった。「この世はもうじきおしまいだ、赤んぼ作るにや遅すぎる。どなたの歌やら子守唄……」三度結婚したマリリン・モンローにも、そういうええ子供はいなかった。

信夫山しのぶむかしのうかれ女のノーマ・ジーンの乳房するどし